

フランス語表現 *c'est allé* と *ça a été*

曾 我 祐 典

0. はじめに

フランス語では、人やものごとの調子を表す場合にしばしば (01) – (04) のような指示代名詞 *ça* と動詞 *aller* の単純形の組み合わせを用いる⁽¹⁾。

(01) a. *Bonjour. Ça va ? – Oui, ça va, merci. Et toi ?*

b. *On part quand ? – Demain matin, ça va ?*

(02) *Je suis venu voir si ça allait.*

(Deschamps, J. 1996, *Méfie-toi de l'eau qui dort*)

(03) *Qui c'est qui veut un sandwich ? Le jeune homme ? – Merci, ça ira.* (Gavalda, A. 2004, *Ensemble, c'est tout* : 473)

(04) *Nous, on espérait que ça irait.*

一方、発話時点までのことを表す場合——たとえば、レストランでウェイターが食事を終えた客に感想を求めたり、学生同士が試験直後に「できた？」とたずね合ったりするとき——は、*aller* の半過去の (05 a) と複合過去の (05 b) は容認度が低いが、*être* の複合過去の (05 c) は用いることがある⁽²⁾。

(05) a.**Ça allait ?*

b.**C'est allé ?*

c. *Ça a été ?*

この *ça a été* について⁽³⁾、TLF は文体を “*familier*” とし、類義表現として *ça a marché* を、参照表現として *ça va* を示している。本稿では、(05) のような場合に、複合過去の動詞としては *aller* ではなく *être* を用いるしくみを明らかにしたい。以下では、まず *ça allait* ではなく *c'est allé* が期待さ

れることを複合過去と半過去のはたらきの違いから説明し (1)、次に〈*ça + aller*〉を調子の表現に用いるしくみと *aller* の複合過去の使用条件を検討し (2)、最後に *ça a été* を用いる理由を考える (3)。

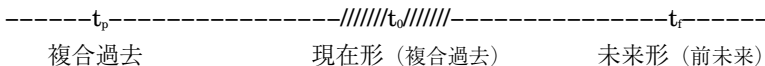
1. 〈*ça + aller*〉と複合過去・半過去

1. 1. 複合過去と半過去のはたらき

(05) のような場合に期待されるのが *aller* の半過去の *ça allait* ではなく複合過去の *c'est allé* である理由を明らかにするために、直説法の体系を概観しておこう⁽⁴⁾。

通常、発話者には自分が現在スペース（発話時点 t_0 を中心とする時間的広がり。図 1 の斜線部分）にいるという意識がある。発話者は、現在スペースのさまざまな事態を表すときに現在形（行為が完了段階であれば複合過去）を用いる。発話者はまた、現在スペースから過去方向を振り返って記憶の中にある事態を「こういう出来事があった」と取り出すことがあるが、これも複合過去で表すことができる。さらに発話者は、現在スペースから未来方向を展望して思い描く事態を表すときに未来形（行為が完了段階であれば前未来）を用いる。現在スペースにおいて想起する過去と未来の事態の時点・時期を、それぞれ t_p と t_f で示すことにしよう。

図 1



発話者は、現在スペースにいるという意識を保ったまま、1) 現在スペースの現実との対照のために、または 2) 過去の出来事や時間的狀況などをきっかけとして過去のある時間的広がりである過去スペースを想起し、そこに自分が仮に移っているような気持ちになることがある。1) は、たとえば、別の場所に

いると思っていた人に出会って驚き、「相手がここにいる」という現実を契機として出会う前の過去スペースを想起するような場合である。過去スペースの「～と思っていた」という事態は(06)のような半過去の発話で表すことが多い。

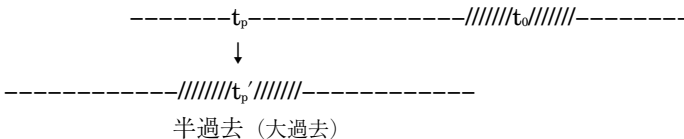
(06) *Ça alors ! Je vous croyais à Nice !*

2) は、たとえば、記憶の中から「彼女と知り合った」という過去のある時点 t_p において生起した出来事を取り出し、それを契機に「そのころ」という過去スペースを想起する場合である。過去スペースのある時点 t_p' に仮に移っているような気持ちになって、そこで展開中の「彼女が出版社で働くこと」という事態に言及しようとするときは、(07) のような発話を構成することになる。

(07) *Quand je l'ai connue, elle travaillait dans une maison d'édition.*

多いのは2) の場合で、上の(02) もこれに該当する。発話者は、過去スペースのさまざまな事態を表すときに、半過去（行為が完了段階であれば大過去）を用いる⁽⁵⁾。

図 2



1. 2. *ça allait* と *c'est allé*

過去スペース（図2の下の横軸の斜線部分）の重要な特性は、現在スペース（上の横軸の斜線部分）が属する時間の流れには属さない、現在スペースとは断絶した別個のスペースとして発話者が想起しているということである。

さて、(05) のような場合に *ça allait* を用いない理由であるが、もしも半過去を用いるとすれば、過去のある場面のことを話していることになる。たとえばウェイターまたは学生が、食事を終えた客または試験直後の同級生に *Ça*

allait ? と言うとすれば、「(食事をしていた／試験を受けていたあのときのあの場面で) ものごとは順調に運んでいた?」と聞くことになり、発話内容は発話時点に直接のつながりのない過去スペースの事態になってしまう。言うまでもなく、ウェイターが客に感想を求めるのも学生が同級生に試験の出来をたずねるのも、発話時点における満足感や達成感などを確かめるためである。したがって、半過去は不適切で、現在スペースにおいて完了段階に達している行為を表す複合過去が適切であることになる。

ところが実際には、(05) の場合に *c'est allé* を用いることは容認されない。言語実態の観察からも、調子を表すために *aller* の複合過去を用いることは、主語が *ça* 以外であってもごく限られていることが分かる。〈*ça* + *aller*〉で調子を表すしくみと *aller* の複合過去の使用条件を次に検討することにしよう。

2. *aller* の複合過去

2. 1. *aller* のはたらき

〈*ça* + *aller*〉を調子の表現に用いるしくみを理解するために、*aller* がどのような動詞であるかを確認しておこう。それには、TLF その他が *ça a été* の類義表現と見なす *ça a marché* の *marcher* との比較が有益であろう。*marcher* については、辞書に次のような記述が見られる。

(08) a. *Aller d'un endroit vers un autre en faisant une suite de pas à une cadence modérée. (TLF)*

b. *Se déplacer par mouvements et appuis successifs des jambes et des pieds sans quitter le sol. (PR)*

marcher の基本のはたらきは、人や動物がある場所から別の場所に向かって足を進める歩行行為を表すことと考えてよい。発話者は、だれかが歩行行為をすることだけを伝えようとする場合は、*Léa marchait*. のように補語の無い発話を構成する。

歩行はごく日常的な行為であるだけに、人はそのしかた（様態）に関心を寄せることが多く、「上手に」、「ぎこちなく」や「ゆっくり」、「重々しく」などさまざまな様態を区別し、それを多様な補語によって表すことができる。そのごく一部を（09）に示そう。

- (09) Léa marchait bien/mal/vite/lentement/pesamment/silencieusement/d'un pas rapide.

歩行がどこからどこまでかを示そうとする場合やどこにおける行為かを示そうとする場合は、(10 a, b) のように状況補語を添える。

- (10) a. Léa marche de la station de métro Odéon à son bureau.
b. Léa aime marcher dans le Quartier latin.

aller は、このような *marcher* とかなり異なる動詞である。辞書には次のような記述が見られる。

- (11) a. Le verbe marque un déplacement depuis un point de l'espace jusqu'à un autre. (TLF)
b. Marque le déplacement d'un lieu dans un autre. (PR)

使用実態の観察からも、*aller* の基本のはたらきは、空間のある点から別の点までの移動を表すことであると考えてよい。*aller* については、発話者がいるところを出発点としてそこから遠ざかる移動を表すためによく用いること、移動先が発話者のいるところであってはならないという制約があることなどがよく知られている。

aller 自体はどこからどこにどのようにして行くかなどについて示唆を与えないが、まさにそのようなことを問題にするとときに用いる動詞である。*marcher* の場合とは違い、*i-*で始まる未来形・条件法現在の場合を除いて(12)のような行き先や移動手段を示す補語の無い発話は容認されない。(13), (14)のようにそれらを示す補語を添えるのが原則である。

- (12) *Léa va.

- (13) a. Léa va à Lyon/chez ses parents.
b. Léa y va.

c. *Ce train va de Tokyo à Osaka.*(14) *Léa (y) va à pied/en voiture/par l'avion de 13 heures.*

aller の表すある地点までの移動は、*marcher* の表す歩行運動と比べてより抽象的な行為である。実際、たとえば *Léa marche.* が表す事態ならレアが歩いている姿を思い描くことが難しくないのに対して、*Léa va à Paris.* が表す事態は移動の様態が不明でレアが移動中の姿を思い描くことができない。とりわけ、*aller* が表す移動の主体が人の場合は、行き先以上に様態に関心を寄せることは考えにくい。実際、ある地点に至る移動について、「上手に」、「きちんと」などの様態を考えることはできないので、*bien, mal* を *aller* に添えても意味をなさず、(15) は容認されない。

(15) # *Léa y va bien/mal.*

また、対話場面・文脈の適切な支えが無い場合には、(16) のような発話も容認度が低い。(17) のように主語の表すものが移動手段である場合は、移動のしかたが関心事となるのは自然なことだから、様態補語のみをとまなう発話も容認される。

(16) ? *Léa va vite/lentement/pesamment/silencieusement/d'un pas rapide.*(17) *Ce train va vite/lentement.*

2. 2. 移動の用法から調子の用法へ

ここでは、移動を表すことを基本のはたらきとする *aller* を調子の表現に用いるしくみがどのようなものであるかを検討しよう。それには、やはり、*marcher* の場合と比較することが有益であろう。実際、発話者はしばしば *marcher* を用いて機械類の動きが順調かどうかを表す。その際、調子の良し悪しを表す *bien* や *mal* のようなことばを添えることもある。

(18) a. *Ma montre ne marche plus.*b. *Le lave-vaisselle marche mal.*

機械類の作動状態を、左右の足を交互に規則的に動かす人の歩行行為にたと

えていると考えられる⁽⁶⁾。

また、人間の活動や試みなどが順調かどうかを表そうとして、多くはくだけた話しかたの場面で、*marcher* を用いることがある。*bien* や *mal* のようなことばを添えることも珍しくない。

(19) *Aujourd'hui, les affaires marchent moins bien que du temps de Clinton, (...)* (*Le Monde* 2004. 11. 03)

(20) *Eh bien, figurez-vous que j'ai commencé comme avocat, et que ça n'a pas marché.* (Hartzmark, G. 1992, *Le Prédateur*)

一方、人については、調子の表現として (21) のような発話を構成することはない。

(21) # *Comment marchez-vous ?*

「どのように歩きますか？」という質問と解釈されてしまうからである。*marcher* を人について用いれば、当然、基本の意味の「歩く」が優先され、たとえ (22) のように *bien* や *mal* を添えても歩行の話にしかならず、調子の表現としては容認されない。

(22) # *Mes amis marchent bien.*

しかし、くだけた話しかたのときに、対話場面・文脈によって歩行の解釈が妨げられている場合には、人を主語とする (23), (24) のような発話においても *marcher* を用いることがある。ただし、足を踏み出す歩行にたとえて「話に乗る、真に受ける」といった行為を表しているものであり、調子の用法ではない。

(23) *Léa a menti à son ami et il a marché ! Il a avalé tout ce qu'elle disait.*

(24) *Paul a fait une proposition à Jean ; Jean a marché dans la combine !* (Picoche, J. 1993 : 181)

さて、*aller* の調子の用法である。調子が人やものごとの具合・状態のことであるのに対して、*aller* が表すのは「ある場所に至る移動」という完結型行為である。つまり、行為タイプの点で、調子の表現に *aller* が適しているとは

言えない。それでも調子を *aller* で表すことができるのは、人やものごとの勢い・進み具合・なりゆき・移り変わりといったものが *aller* によって喚起されるからである。ということは、*aller* の調子の用法が成立するためには、*aller* が「行く」の意味で解釈されないことが、つまり移動の用法が抑えられていることが前提になる。言い換えると、移動の用法をブロックするような対話場面・文脈が不可欠である。

そのことを、5種類の主語について見ておこう⁽⁷⁾。(25 a-e)のどの主語でも、*aller* に *bien* を添える場合は、調子の用法の発話として容認される。

- (25) a. 人を表す GN : *Léa va bien./Mes parents vont bien.*
- b. 人体の部分を表す GN : *L'épaule va bien. Je n'ai ressenti aucune douleur. (Le Monde 2003. 04. 21)*
- c. 人の活動を表す GN : *L'économie va bien./Les affaires vont bien.*
- d. 不定代名詞 *tout* : *Tout va bien.*
- e. 指示代名詞 *ça* : *Ça va bien.*

上で(15)について述べたように、*bien* が移動を表す *aller* の様態補語になることは考えられないのだから、*bien* をともなう *aller* は移動の用法がブロックされる。そして、*bien* が「順調に、都合よく、うまく」を表せることから、調子の用法が促されるのである。一方、適当な補語が無い場合は、主語が *ça* である(26 e)と違って、(26 a-d)はどれも容認されない。

- (26) a.**Léa va./*Mes parents vont.*
- b.**L'épaule va. Je n'ai ressenti aucune douleur.*
- c.**L'économie va/*Les affaires vont.*
- d.**Tout va.*
- e. *Ça va.*

(26 a-d)の場合、*aller* は移動の用法をブロックする補語をともなわず、調子の用法を促す対話場面・文脈の要素もない。したがって、*aller* は「行く」を表すはずである。ところが、人を話題にする(26 a)は行き先などの補語が無いために不適格な発話ということになる。(26 b, c)は主語が身体

部分または活動を表すことから移動動詞との組み合わせは不自然である。(26 d) の *tout* も「すべて、一切」を指す不定代名詞だから移動動詞との組み合わせには制約がある。

それでは、調子の表現として容認される (26 e) はどのような特性をそなえているのだろうか。(26 e) の主語の指示代名詞 *ça* は、対話場面にあるものを指すことを基本のはたらきとする。しかし、対話の中で話題になっている事物を指すこともあり、さらには何を指すか分かってもらえると発話者が判断しさえすれば用いることのできる、その意味では何でも指せる代名詞である。対話場面にある移動主体 (たとえば電車) を指すこともでき、その場合には *aller* の移動の用法はブロックされない。しかし、*ça va* だけでは行き先などの補語が欠けているために移動の意味では解釈できない発話になってしまう。

ここで、*ça va* を問題なく用いることができるのがどのような場面であるか考えてみよう。代表的なのは、いうまでもなく出会いの場面であり、(27) のようなやりとりがよく観察される。

(27) (=01 a) *Bonjour. Ça va ? – Oui, ça va, merci. Et toi ?*

出会いばなに口にするのだから、*ça* が特定の移動主体を指したりすることはない。また、*aller* が行き先などを示す補語をとまなわないことから、*ça va* は明らかになにかが移動することを表していない。つまり、発話の構成要素だけでなく対話場面の特性によっても *aller* の移動の用法はブロックされている。一方で、出会いの場面は人やものごとの調子を話題にするのがごく自然な場面である。そして、何でも指せる *ça* は、たいていは人の体調や心理状態を指すが、家族や仕事や人間関係などを指すこともできる。何を指すかは、発話者と相手のあいだの関係と共有している経験・記憶、出会った場面の性格などさまざまな要因が関与し、多様である。

もちろん、調子の表現としての *ça va* は出会いに限らず、さまざまな場面において観察される。(28) はいつ発つか聞かれて「明日の朝」と答えた場面で、日程が相手にとって好都合であるかどうか確かめることは自然である。(29) は、「送っていきます」と申し出てくれた相手に対して、送ってくれな

くても大丈夫という見通しを伝える場面である。

(28) (=01 b) *On part quand ? – Demain matin, ça va ?*

(29) *Je vous raccompagne. – Ça ira, je connais le chemin, je vous remercie.*

冒頭に紹介した (03) は小説中のやりとりの一部だが、前後を含む原文は (30) のとおりで、カフェの主人にサンドイッチをすすめられた青年が「ありがとう、(もらわなくて) 大丈夫」と答える場面である。

(30) *Messieurs, gouailla la patronne, l'pain est arrivé. Qui c'est qui veut un sandwich ? Le jeune homme ? – Merci, ça ira. Oui, ça ira. Dans le mur ou ailleurs ... On verra.*

(A. Gavalda, 2004, *Ensemble, c'est tout* : 473)

答えた後の *Oui* 以下は青年の気持の描写だが、自分が口にした *ça ira* という表現を契機として、*ça ira dans le mur ou ailleurs* 「(自分の状況が) 壁にぶつかることになるかほかのところに行き着くことになるか」という移動のイメージを活かした比喩的表現に移行しているのは興味深い。

他のさまざまな発話例の分析からも、一般に、〈*ça + aller*〉の使用条件は次のようなものであると考えられる。

(31) 〈*ça + aller*〉は、対話場面・文脈から人やものごとの調子を話題にしていることが相手に分かってもらえると発話者が判断する場合に用いることができる。

それでは、複合過去の発話はどうか。それを次に検討することにしよう。

2. 3. *aller* の複合過去と *c'est allé*

aller は、上で述べたように、表す行為が「ある場所に至る移動」という完結型である点で、もともと調子（人やものごとの具合・状態）の表現に適してはいない。そして、1.1. で述べたように完了段階に達している行為を表す複合過去は、完了行為を踏まえた現在の事態や過去の出来事を表すときに用いる活用形である。したがって、この2つの特性をそなえた *aller* の複合過去は、移

動の用法ととくに相性が良いことになる。実際、上で見た (13), (14) の現在形を複合過去に変えた (13'), (14') の発話は、すべて問題なく移動の用法で解釈される。

(13') a. Léa est allée à Lyon/chez ses parents.

b. Léa y est allée.

c. Ce train est allé de Tokyo à Osaka.

(14') Léa (y) est allée à pied/en voiture/par l'avion de 13 heures.

aller の複合過去がこのように移動の用法ととくに相性が良いということは、それだけ移動の用法がブロックされにくく、調子の表現としての適性が低いということを意味する。実際、(25) は *bien* によって移動の用法がブロックされて (31) に示した条件を満たすために調子の用法の発話として容認されるが、現在形を複合過去に変えるだけで、調子の用法の発話としての容認度が低くなる。

(25') a. ?? Léa est allée bien. /??Mes parents sont allés bien.

b. ?? L'épaule est allée bien. Je n'ai ressenti aucune douleur.

c. ?? L'économie est allée bien. /??Les affaires sont allées bien.

d. ?? Tout est allé bien.

e. ?? C'est allé bien.

まして、移動の用法をブロックする要素をともしない場合、*aller* の複合過去の発話は容認度がきわめて低い。実際、現在形の (26 e) は *bien* をともしなくても (31) の条件を満たすために調子の用法の発話として容認されるが、現在形を複合過去に変えるだけで、容認されなくなる。

(26') e. *C'est allé.

このことを、(05) に即して見ておこう。(05) の場面として考えられるのは、レストランでウェイターが食事を終えたばかりの客に話しかけたり、試験直後に教室から出てきた学生同士がことばを交わしたりする場面などである。これらはさまざまなことを話題にしうる場面だから人やものごとの調子について話すこともありうるが、その蓋然性は出会いの場面のようには高くはない。ま

た、先行文脈は無いか無いにひとしいかなので、文脈によって移動の用法がブロックされることもない。(05)の場合は、このように(31)の条件を満たさないために、*c'est allé* を用いることができないのである。

主語が指示代名詞以外の場合はどうか。移動の用法をブロックする対話場面か文脈の支えがあれば、*aller* の複合過去を用いて調子を表すことができる。たとえば、母親の体調を話題にしている場面で、(32)のように直前の文脈に *Ma mère va bien* のような要素がある場合は、インフォーマントも *aussi bien* をともなう(32 a)を非常に不自然とは判定しない。

- (32) *Ma mère va bien,*
 a. *?elle n'est jamais allée aussi bien.*
 b. *elle n'a jamais été aussi bien.*

また、捜査当局が電話の盗聴によって情報を得ていたことを述べる新聞記事で、ものごとが順調に進むことを示す *bon train* という補語を *aller* の複合過去に添えた発話を用いる例が見られる。

- (33) *Les pandores savaient pertinemment ce qu'ils cherchaient.*
 Depuis le début de l'année, les écoutes sont allées bon train.

(*Le Nouvel Observateur* 2354, 2009. 12. 17-23: 28)

主語が指示代名詞の *c'est allé* も、対話場面・文脈の強力な支えによって調子の用法の発話として容認されることが無いわけではない。たとえば、レストランでウェイターが食事を終えたばかりの客に感想を求める場面で、*comme vous vouliez* のような補語を *aller* に添えるなら、(31)に示した条件を満たすことになる。インフォーマントは(34)を調子の用法の発話として適切と判定するのである。

- (34) *C'est allé comm vous vouliez ?*

また、学生がサークル活動がうまくいっていなかった時期が過去にあって、その当時のことを話している場面を想定しよう。はじめてから活動の具合・調子の話をしているわけである。その時期に顧問の教員が適切な助言をしてくれて、そのおかげで「すぐにうまくいくようになった」とか「その後、ますます

順調に運んだ」とかを *mieux* や *de mieux en mieux* のような補語で示すなら、(35)、(36) も調子の発話として容認される。

(35) *C'est tout de suite allé mieux.*

(36) *Par la suite, c'est allé de mieux en mieux.*

調子の表現としての *c'est allé* の使用には厳しい制約があることを見てきたが、*c'est allé* が容認されない対話場面・文脈で *ça a été* を用いることがある。そのしくみを次に考えよう。

3. *ça a été* を用いるしくみ

3. 1. *ça a été* の文体と構文

まず、どのような場面で *ça a été* を用いるかを確認しておこう。(37) は、すでに述べたように、レストランでウェイターが客に感想を求めるときや試験直後に学生同士が「できた?」とたずね合うときなど、さまざまな場面で用いる疑問文である。

(37) (=05 c) *Ça a été ?*

(38) は、親が学校から帰ってきた子どもに「うまくいった? 学校では」とたずねる場面の質問である。

(38) *Ça a été, à l'école ?*

また、(39)、(40) は、職場やキャンパスでの一日が終わって帰宅しようとしている同僚同士・学生同士のやりとり、または帰宅しただれかと家族のやりとりである。

(39) *Ça a été, aujourd'hui ? – Pas mal, oui. Et toi ?*

(40) a. *Alors, ta journée, ça a été ? – Bof.*

b. *Aors, ça a été ta journée ? – Bof.*

これらの発話例の *ça a été* は人やものごとの調子について「良かった、うまくいった、順調だった」を表すわけだが、(37)–(40) は、原則として家族、友人、同級生、同僚といった親しい間柄のことばである。*ça a été* の使用

は、文献やインフォーマントも指摘するとおり、くだけた話しかたの場面に限られる。

ところで、*ça a été* は〈*ça+être*+属詞〉の構文ではない。目の前にあるものや相手が話題にしている事物が何であるかたずねるために属詞構文の *C'est ...?* をしり上がりに言って相手に属詞を補うよう求めることがあるが、*Ça a été ?* はそれではなく、〈*ça+être*〉の構文なのである。その根拠として、次の2点をあげることができる：

- 1) 質問する側は *oui* の答えを期待する姿勢であり、聞かれた側は *Ça a été*. と答えることはあっても、*Ça a été bon/bien*. のように属詞を言い添えることはない；
- 2) *ça a été* の直後に、(38)、(39) の *à l'école, aujourd'hui* のような状況補語を付け加えたり、(40) の *ta journée* のような話題を言い添えたりすることができる。

同じ〈*ça+être*〉の構文でも、現在形の *c'est* や半過去の *c'était* がそれだけでは不完全な文であるのに対して、複合過去の *ça a été* は補語なしで十全の文として機能するという特性をもっているわけである。それがどこから来るかを次に考えよう。

3. 2. *aller* の複合過去に代わる *être* の複合過去

周知のように、くだけた話しかたの場面では、しばしば *aller* の複合過去の代わりに *être* の複合過去を用いることがある。

たとえば、「～に行ったことがある／ない」のように経験を話す場合に、くだけた話しかたの場面では(41)の代わりに(42)のように言うことがある。

- (41) a. *Je suis allé au Japon deux fois.*
 b. *Elle n'est jamais allée au musée du quai Branly.*
- (42) a. *J'ai été au Japon deux fois.*
 b. *Elle n'a jamais été au musée du quai Branly.*

また、「昨日／先月～に行った」のように過去の出来事を表す場合にも、く

だけの話しかたの場面では (43) の代わりに (44) のように言うことがある。

(43) a. *Je suis allé hier au cinéma.*

b. *Elle est allée à Paris le mois dernier.*

(44) a. *J'ai été hier au cinéma.*

b. *Elle a été à Paris le mois dernier.*

(41), (43) で *aller* が移動を表すのは基本のはたらきに沿っているにすぎないが, (42), (44) の *être* が問題である。*être* については, 〈GN + *être* + 場所の補語〉の構文で「所在」が表せることがよく知られている。そして, *être* の複合過去は「ある場所にいる」という事態が生起したこと, つまり, ある場所にいるようになったことが表せる。したがって, (42), (44) のような発話は, *aller* の複合過去と同じように, ある場所に移ったこと (ある場所に至る移動) が表せることになる。

「～しに行った」のように移動目的を示す場合にも, くだけた話しかたの場面では (45 a, b) の代わりに (46 a, b) のように言うことがある。

(45) a. *On est allés manger quelque chose au Royal Maroc, une maison assez distinguée.*

b. *Tout à l'heure, elle est allée demander la permission au directeur.*

(46) a. *On a été manger quelque chose au Royal Maroc, une maison assez distinguée.*

b. *Tout à l'heure, elle a été demander la permission au directeur.*

これは, (42), (44) の「所在」の用法の拡大したものと説明することができる⁽⁸⁾。

このように, くだけた話しかたの場面では, *être* の複合過去は *aller* の複合過去に相当するはたらきをするのである。調子の表現として *c'est allé* が容認されない場合に, フランス語話者が代わりに *ça a été* を用いるのはごく自然なことと言える。

4. おわりに

本稿では、フランス語における調子の表現法を検討してきた。周知のとおり、しばしば指示代名詞 *ça* と動詞 *aller* の組合せである〈*ça + aller*〉を用いるが、(05)のように発話時点までの調子を話題にする場合は、半過去の *ça allait* を用いることがない。これは、半過去が現在スペースとは断絶した過去スペースの事態を表す形態であり、*ça allait* を用いると発話時点に直接のつながりのない事態を表すことになってしまうからであると説明できる。

aller は、「ある場所に至る移動」という完結型行為を表すのだから、もともと調子（人やものごとの具合・状態）の表現に適しているとは言えない。そして、複合過去は、完了行為を踏まえた現在の事態や過去の出来事を表すときに用いる形態である。この2点から、*aller* の複合過去はとくに移動の用法と解釈されやすく、それだけ「〈*ça + aller*〉は、対話場面・文脈から人やものごとの調子を話題にしていることが相手に分かってもらえると発話者が判断する場合に用いることができる」という(31)に示した条件を満たしがたい。そのために、発話時点までの調子を話題にする場合に、補語をとみなわない *c'est allé* を用いることはない。

c'est allé に代わって用いることが多いのは *ça s'est bien passé* であるが、くだけた話しかたの場面では *ça a été* がよく用いられる。これは、くだけた話しことばにおいて *être* の複合過去が *aller* の複合過去の代用表現と見なされていることによると説明できる。状態動詞の代表と言える *être* が完結型行為を表す *aller* の代わりをすることがあるのは興味深い。

動詞 *aller* には本稿で扱わなかった用法もある。*aller* とならば移動動詞である *venir* にも多様な用法が認められる。両動詞を対照しつつそれらを記述することが次の課題である。

注

- (1) 出典を示していない発話例は、インフォーマント（フランス人 3 人）の協力を得てわれわれが作成したものである。Jean-Paul Honoré 氏（Univ. Paris-Est）、関西学院大学の同僚 Olivier Birmann 氏、井元秀剛氏（大阪大学）、小田涼氏（京都大学）との討論から多くの示唆を得ることができた。
- (2) *Ça s'est bien passé* ? もよく用いる。ウェイターが食事の感想を求める場面の (05 c) は、「良かった?」「良かったでしょ?」といったやや馴れ馴れしい表現と受け取られることが多いようである。われわれの観察では、近年、フランスではサービス業の従業員が客に親しい間柄の口調で話す傾向が強まっており、ウェイターの *Ça a été* ? もそのひとつと言える。このような話しかたが広がっていることは社会言語学的に興味深い問題であるが、本稿では論ない。
- (3) つづりとしては *ç'a été* もあるが、本稿では *ça a été* とする。これについては、朝倉（2005）を参照。
- (4) 詳細については曾我（2010 予定 b）を参照。
- (5) 過去スペースから見た過去の出来事は大過去で、未来の事態は条件法現在・過去で表す。半過去については、次の 3 点も重要である：1）発話者は、過去スペースに、現在スペースについて行う操作をほぼそのまま適用していると考えられる；2）半過去で表す事態が *t₀* まで持続しているかどうかについては、半過去自体は情報を与えない；3）半過去は、現在スペースだけでなく過去スペース・未来スペースから想起する「以前スペース」のさまざまな事態を表す場合にも用いる。
- (6) フランス語におけるこのようなメタファー（擬人化）については大橋（1993）を参照。
- (7) 調子の表現として用いうるものとしては、次のように不定代名詞 *quelque chose*, *rien* を含むものもあるが、本稿では扱わない：Dis-moi, tu m'intrigues en ce moment. *Quelque chose ne va pas entre Nina et toi* ? (Clavel, B. 1962, *La grande patience*) ; L'Europe donne l'impression de progresser de manière bancale : le projet de monnaie unique se porte bien, mais à côté rien ne va. (*Le Monde* 1997. 09. 10)
- (8) さらに、「行き過ぎる、度を越す」のような比喩的な意味を *aller* (un peu/trop loin) で表す (*Cette fois, elle est allée un peu/trop loin.*) 代わりに *être* で表す (*Cette fois, elle a été un peu/trop loin.*) こともある。

主要参考文献

- 朝倉季雄（2005）『フランス文法ノート 3. *ce/ça, cela/il(s), elle(s)*』『フランス文法集成』, 白水社, 200–206.

大橋保夫（1993）「第 1 章 テレコ・自由の女神・ボードレール」『フランス語とはどういう言語か』，駿河台出版社，3-5.

曾我祐典（2010 予定 a）「フランス語質問箱：「サアエテ？」と *Ça va ?* の正体」『フランス語学研究』44.

———（2010 予定 b）「*depuis* が導く時況節の動詞時称」『フランス語学の最前線』（仮題），ひつじ書房.

BUSSE, W. (1977), *Französisches Verblexikon*, Klett-Cotta.

PICOCHE, J. (1993), *Didactique du vocabulaire français*, Nathan, 179-181.

———文学部教授———